

Steel 鉄の点景 Landscape



—心に温もりを伝える—

石炭ストーブ

石炭ストーブは、かつて北国の生活にとって欠かせない暖房器具として隆盛を極めた。現在、エネルギー源の多様化により、石油、電気、ガスなどの各種ストーブが利用されるようになり、最近ではエアコンが急速に普及するに及んで、石炭ストーブは我々の前からその姿を消していった。しかし、いまだに石炭ストーブには、その姿を懐かしむ声も多い。



日本における石炭ストーブの歴史

北海道開拓の時代、本州から渡ってきた人々は、その厳しい寒さから「水腫病」という奇病にかかり、多くの死者が出たといわれる。

安政3年（1856年）、函館奉行は2人の役人を函館港に碇泊していたイギリス船に向かわせ、船内で使用されていた石炭ストーブをスケッチ・設計させて、それを鋳物職人に作らせた。これが国産ストーブ第1号とされている。

明治時代に入ると、官庁、病院、学校などでストーブが使われるようになり、これがその後のダルマ型やズンドウ型といわれる石炭ストーブの系統になっていく。

その頃、石炭ストーブ以外のストーブも存在していた。北海道の一般家庭に最初に普及したのは、薪を燃料とする薄鉄板

製のストーブである。しかし、第一次世界大戦後、木材工業や製紙工業の発達などで薪の値段が高騰したことと、一方で、炭鉱開発の進展や交通輸送網の整備によって、石炭の入手が容易となったことなどが原因で、石炭ストーブの試作・研究が盛んに行われるようになった。

石炭が社会生活を支えるエネルギー源として定着した大正末期から昭和初期にかけて数多くのストーブメーカーが全国に誕生した。また、道内のメーカーが良質の鋳物ストーブを大量に製造するため、全国の鋳物産地に工場を移転するようになり、日本のストーブ工業は飛躍的に発展したのである。

ストーブ生産の一大拠点・川口

ストーブ生産の最盛期は昭和22年から30年頃で、その生産の中心は埼玉県川口市辺りであった。当時、全国のストーブ

福祿石炭ストーブの変遷 (川口市有形民俗文化財「福祿石炭ストーブのコレクション付ポスター」より)



1号(角型・貯炭式)
大正15年(1926)

座り福祿(貯炭式)
昭和5年(1930)

豪華型(貯炭式)
昭和10年(1935)

炊事福祿(貯炭式)
昭和11年(1936)

寸胴尺(投込式)
昭和16年(1941)

生産の約8割を担うまでになっていた。

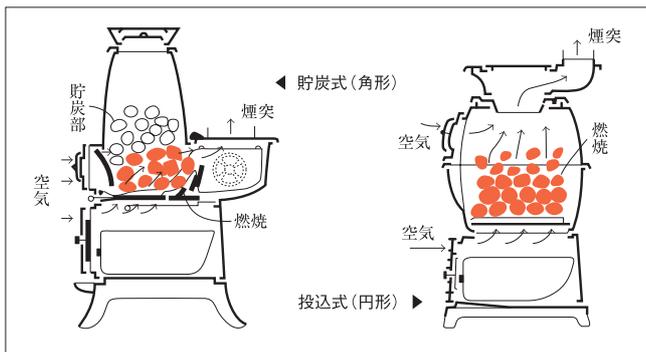
川口では室町時代末期にはすでに鋳物業が行われていたという。本格的に石炭ストーブ生産が始まったのは大正14年である。北海道の「株式会社 福祿ストーブ」(貯炭式石炭ストーブの先発メーカー)が川口を生産拠点に選んだことによる。昭和10年に建設された同社川口工場はモルディングマシン、ローラーコンベア、高級旋盤、モーター直結の堅型ボール盤、メッキ装置などを完備し、一貫量産体制を整えた最先端のストーブ専門工場であった。このように石炭ストーブが鋳物生産オートメーション化の先駆となったことは、意外と知られていない。

投げ込み式と貯炭式

石炭ストーブは「投げ込み式」と「貯炭式」に大別される。投げ込み式の代表格がダルマストーブである。ちなみに、本州の人がダルマストーブと呼ぶのは、胴体が膨らんでいる「胴張型」で、北海道でダルマストーブといえば、膨らみのない「ズンドウストーブ」に近い形である。一口にダルマといっても、統一した形態をさすものではないらしい。

投げ込み式は、煙突を上部に設け、空気を風窓から上に流し(上向き通風式)、それに伴って燃焼部にある石炭を一気に燃焼させる。このため高い熱量が得られ、駅の待合室、工場、学校など人の出入りの激しい場所に適していた。しかし、石炭が短時間で燃えるので、頻繁に給炭しなければならない。

貯炭式と投込式ストーブの断面図



一方、貯炭式はドイツのユンケルストーブを参考に考案されたストーブで、煙突を胴の横につけて空気を横に流す(横向き通風式)。この機構により、まず空気が流れる燃焼部にある石炭を燃焼させ、次に燃焼部の上部(貯炭部)の石炭が燃焼する仕組みになっている。また、胴体に縦や横方向の「ひれ」をつけることによって、放熱面積を広げ、放熱効果の増大を図る工夫もなされていた。燃焼時間が長く、給炭回数も少ない。投げ込み式のように給炭のたびに煤煙や粉塵の噴出もあまりない貯炭式の登場により、一般家庭にも石炭ストーブが普及していったのである。

石炭ストーブの衰退

全国に普及していった石炭ストーブも昭和40年頃を境に、石油ストーブにその主役の座を奪われ、姿を消していく。埼玉県川口に本社を移した福祿ストーブも平成4年に廃業した。現在、川口で石炭ストーブを扱っているのは、ただ1社である。それも、製造・組み立てはすべて中国で行っている。

川口で最後の石炭ストーブメーカーとなった株式会社 田中機械製作所の田中薫社長はこう語る。

『ストーブというのは不思議ですね。燃え上がる炎を見ているだけで楽しい。遠い昔の記憶やら思い出が「ふうっ」と甦ってきます。そして誰しもうる顔になるんです。ストーブはドーンとあぐらをかいだ親爺みみたいなもので、居心地のよい場所というのはそういうものなんだろうと思いますよ』。

冬場の北海道などでは、「ダルマストーブ」が設置された観光列車も運行されて、観光客にとっても冬場の魅力のひとつになっている。無骨ではあるが、心を和ませる優しさ、温かさが伝わってくる石炭ストーブ……そこに言い知れぬ郷愁と親しみを感じ取る人々は、いまだに多い。

■参考文献
「ストーブ博物館」(北海道大学図書刊行会)
「川口市民俗文化財調査報告書第5集 川口のストーブ生産」(埼玉県川口市教育委員会)
■取材協力・写真提供
川口市教育委員会/野呂希一・石山祥次/株式会社田中機械製作所